

日時:2007年11月17日(土)午後2時半から5時
会場:東向島百花会館(墨田区東向島3丁目29-5)

2007年度 第1回 交流のサロン



第一部 向島まちづくりの今後について語る (2時半~3時45分)

かつて向島をフィールドに様々な調査・研究・提案を行った学生達はその後、どのような活動をしているのでしょうか? また、今の向島の動きをどのように見ているのでしょうか? 「向島博覧会」以降に参加した元学生会員を中心に、その後の様々な取り組みと最近の向島への関心を発表していただき、参加者とのトーク・セッションを試みました。

ゲスト:『まちの力強化委員会(仮)』
卒業生を中心とした建築・まちづくりの研究グループ
コーディネーター:真野(向島学会事務局)
コメンテーター:向島学会メンバー、当日参加者



が、
11月17日(土)
東向島百花会館
で開かれました



発行 向島学会
代表 高木新太郎

131-0032
東京都墨田区東向島三丁目4番2号
03-3610-1378 (TEL・FAX)

入会金 3,000円
(学生会員 1,000円)
月会費 500円
(学生会員 100円)

郵便振り込み [00130-7-723191 向島学会]
「交流サロン」やHP等でも受け付けます。



仲間になりませんか!

向島学会では、会の目的に賛同し、活動に主体的に参加するとともに、活動の成果を会に提供する個人を対象に会員を募っています。会員2名の推薦が必要ですが、交流サロンなどに参加していただき、その後、会員に申し込まれることをお勧めします。

<http://www.mukojima.org/>

第二部 向島学会関連の活動報告・提案 (4時~5時)

- 1) 東京商工会議所主催「大学・地域の協働による学生まちづくりプレゼンテーション大会」
日本都市計画家協会賞受賞提案『くるりんグリーンすみだ』プレゼンテーション: 守武祐子
- 2) 国土交通省「まちづくり計画担い手支援事業」プロジェクト経過報告: 山本俊哉、飯島緑 他
- 3) 向島アート・センター(仮)/アート・まちアーカイブ提案: 曾我高明、渡辺慎二、柳澤明子
- 4) 向島アート・まち大学報告: 曾我高明
- 5) 向島・ドイツ・オッテンゼンの地区交流(ハンブルク・アルトナーレ)提案: 山本俊哉
- 6) 光タワー・プロジェクト報告 報告: 友野健一

7月28日の「新タワー
周辺まちづくり学生提案」
での最優秀賞作品に手を入
れた提案で、実現性も含め
ての受賞です。具体化には
な多くの課題があること
は確かですが、質疑でも具
体化への課題や提案がいく
つも語られたことは、リア
リティ喚起力が高かったこ
との証左だと思えます。

第三部 懇親会(5時半~)

『くるりんグリーンすみだ』受賞報告





まちの力強化委員会(仮)

早大などを卒業したメンバーが「これからの都市デザイン」を考えたところ、都市デザインで価値を生み出す「シンポジウムを契機に集まった会で、卒業したから経験20年ほどまでの専門人が、月1回程度ゼミを続けています。向島路地0年ほどまでの専門人が、月1回程度は、向島博覧会、京島路地0年ほどまでの専門人が、月1回程度は、復興模範訓練、ライスマスなどでつながっています。情報共有や、どうしたら都市デザイン・まちづくりを続けていけるのか、この仕事で食べていけるのか、といった問題意識をもちつつ、まち歩きに京島・向島を訪れました。

都市の風景の一部になるようにと、デザインを「ステューディオハンデザイン」が担当し、曳舟かいわいの写真と詩、加えて、夜の暗さにも配慮して七色の照明計画がなされていきました。第二弾では、周辺住民へのアンケートや詩人の会なども交えて、住民が登場する写真も掲載されています。「小さな景観運動」は、一つ一つは小さいけれど、点在させることで風景を変えることができる、小さいものが風景をつくる、という提案です。

次は、密集市街地での共同建替事例について野田さんから。象地域設計は墨東地域での仕事も多く、木造密集市街地の共同建替にも多く関わっています。どうしたらまちの魅力を活かせるのかというテーマで、練馬区江古田北部地区での事例を報告してくれました。

密集市街地の抱えている問題として、法制面、借地などの権利関係などがあり、建て替えが進まない悪循環に陥っています。なぜ、進まないのか。それは、一人一人の思いをかなえていないのではないかと。そのためには、どこのだれが、どんな要望を持っているのかを知ることが重要で、知った上で計画を提案すべきだという立脚点にいます。江古田の事業も10年ほど取り組んでいて、まず、要望を把握するために地域住民全軒に戸別訪問し、まちの要望、建替の内容、欲しい施設などをアンケートしていきましました。敷地は江古田祭場裏の住宅地で緊急車両も入れない細細街路に面し、平成4年から木造住宅密集地域整備促進事業（現在、住宅市街地総合整備事業）が行われていました。全1500戸の訪問アンケートから、商店と住宅の混在しているところで改善の思いが強く、重点的に入りました。音大通り商店街はシャッター街になりこの先の方策に悩んでいる、住宅は老朽化と権利関係の複雑さを抱えています。そこで、一つの街区単位で一緒に考えようということになり、共同建替の提案を行いました。共同で土地利用はかるとどんなことができるのか、共同利用とは何かについての学習会を月1、2回、次に本敷地でどんなことができるのかの検討会、そして準備会。紆余曲折で4年弱かかりましたが、組合設立。平行して、商店街のまちづくりを懇談会と、すぐに達成できる目標を持った「音大通りを考える会」と、建築のハードとソフトのルールを考えていく「江古田駅北口まちづくりの会」で考えていきます。4m弱の音大通り口は、ちよつと休める場所、おまつり・イベントのできる場所として小広場を検討課題にしました。共同建替候補地が複数あったので、その中で小広場を生み出していきます。納得して生活再建してもらうために集合住宅と戸建をもとに用意し、4階建程度のボリュームに抑えています。かつての路地園芸をベランダ園芸に継続している人もいます。小広場では、完成前の暫定利用では商店街のお祭りや武蔵野音大の仮装パレードイベント等も行われ、ワークショップで検討を重ねて完成しました。密集市街地にとつて大切なのは防災だけでなく、それをきっかけとして商店街や自分たちの暮らしをよくしたいと思っている人がいる。その人たちが合ったやり方、考え方を複数重ねていくことで広がりが出てきます。コーディネートする側が地元の後押しを受けつつ、その人たちのいろいろな思いを話し合っていくことが大事、という報告でした。

杉本さんの報告は、会の紹介とともに仕事として取り組むとどうしても敷地に固着してしまうが、その中からでも波及効果のあるようなまちづくりを目指したい。金銭だけでなく、はかり得ないもの、外部資本にとつてでなく内部の人や地域に還元できるものをまちの「価値」とし、共感され、根づくものと考えている、という発言でした。

次に、メンバーの仕事に関連しての報告です。UR都市機構都市デザインチームに出向した際に取組んだ「小さな景観運動」について石原さん（現・設計組織ADH）からです。長期にわたるURのプロジェクトの中で、短期間で目に見えようというプロジェクトで、集合住宅団地での「小さな景観運動」が始まりました。「ストリートファニチャー・サインの学生プロジェクト」では、車止めをテーマに「最優秀作」止めないで、試作設置、夜の景観配慮、思いがけないベンチとしての使われ方など、興味深い内容です。次に、デザイナーを対象に「アートする駐輪ラック・プロポーター」が、外部審査員も交えて実施され、工藤+加藤案「パド(つばみ)」が選ばれました。そこに自転車などがなくても風景をつくること、面的配置で空間をつくることなどの点で評価され、新宿区の団地にレイアウトデザイン設置されました。

「ひきふね画」はひきふね駅前再開発の仮囲いにデザイン画を施したもので、長期に設置されることから

どこでも根本課題は同じです。本音で何を望んでいるのかを知ること、集まって話し合っている場をつくってほしい、という意欲の表明が若い専門人から語られました。

サロン後、石原さんから次のようなお話を寄稿していただきました。どうもありがとうございました。「ひきふね画」は、設置されている鳥元の学会というところでもあつて直に反応が聞けることを楽しみにしていました。向島学会の皆さんから頂いた意見をこの「ひきふね画」が製作される過程と共に整理することで、今後の参考になればと思います。

「ひきふね画」は、UR都市機構における「小さな景観運動」のひとつとして工事中の殺風景で味気ない仮囲いにデザインを施して歩行者の方に少しでも安心で心地よい空間をつくることを目指して進められたプロジェクトです。

「ひきふね画」に描かれた詩や写真は、ライターとカメラマンが何日も曳舟界隈を散策し製作されました。構成案を受け取った当時、詩と写真でレイアウトされたパネルは、眺めて楽しむ、立止まって楽しむ、そして、照明パネルを組み込むことによる夜の風景も楽しむことができた仮囲いになるという印象を受けました。その中でも横組みのアイキャッチとなる文字と縦組みの文章で構成された詩のインパクトが大きかったのを覚えています。言葉が人に与える影響は大きいので言葉の使い方、言い回しには不安要素はあつたが、地元の方々の会話の中から生まれた詩であるという点もあつて設置するに至りました。設置後、パネルを見た同人誌で詩集を発行している方から掲載の依頼があつたり、盲目の方に読み聞かせをしているボランティアの方から詩の朗読の確認があつたりと、詩に対する反応が意外と多かつたことに驚きました。

向島学会においては、仮囲いにデザインを施すという行為に対しては評価を得たものの、詩に対しては鋭い指摘が多くありました。議論は詩と事業の関係にまで及びました。それだけ関心をもって読んでもらえたことに感謝すると同時に、言葉で表現することの難しさを強く感じました。もちろん、そこに存在する以上事業とは切り離せない部分はあるが、仮囲いのプロジェクトは都市の景観に対する提案として考えられました。詩に対しては個々によって捉え方に違いがあるので多少の意見はあるだろうと想定していましたが、詩の内容から事業との関係を指摘されるとは思いもよらないことでした。そして、議論の中で、「自分たちが話すのなら気にならないけど」という言葉に、地元との会話から生まれた詩ではあつたが、あまりにも素直に受け止めていたことに気づかされました。そして、様々な立場や視点からそのものを捉え直すことの大切さを感じました。大規模な工事において仮囲いは周囲に与えるインパクトが大きいです。これは言うまでもありません。現在はバスや電車にまで広告が氾濫している都市の景観の中で、仮囲いは2次元的な壁としての要素を越えて、通りや奥行きをもつた3次元的な空間として都市の景観に還元できる要素ではないかと思えます。また、仮囲いに限らず都市の景観の中で、デザインの手がつけられない要素もあると思えます。今回の経験を踏まえて、今後有機的であれば都市景観に関する小さな要素について何か提案できればと思います。